

韓国に入国したのは初めての経験だった。今回、台風10号の接近で、出国および帰国が危ぶまれたが、台風の九州地方の停滞で、奇跡的に視察を完遂することができたのは何よりだった。釜山も朝鮮半島南部に位置しており、風も強く雨が降ることもあったが視察に大きな支障がでることはなかった。

入国したときから、韓国のNGOの方から出迎えを受け、地元の方が行かれる窯焼きご飯の店に連れて行って頂いた、夜は韓国海鮮料理、翌日も伝統的な地元の韓国料理、最終日も海苔漁業の方が行かれる貝料理専門店で、心のこもったもてなしを頂いた。また韓国サイドが来日する際は、長良川にちなんだ食材の料理店の選定など郷土食がお互いの伝統文化の理解、交流に重要と考える。バスで移動中も韓国のお菓子を配ってくださるなど本当にきめこまかいもてなしだった。

プレゼンなど交流の場では、韓国語と英語の名札が用意され、記念撮影の場では横断幕も用意された。こうした交流小道具も事前準備が重要と感じた。

K-waterの視察では、日本側報道陣の取材が制限された。内容は秘匿性があるものではないと考えるが、決定権は向こうにはあるというものの、事前に取材の可否について調整が必要ではなかったか。制限があっても頭撮りは可にするとか、これも事前に日韓で決めておくべきだった。視察は、公費で行われるものであり、日本で行われる際も、原則公開で臨むべきではないだろうか。

交流会には、釜山市議会議員の方も出席され挨拶された。ナクトンガン河口堰の開門運用の決定プロセスには議会決定もあったのだろう。今後、愛知県も、今は委員会協議の段階だが、将来は、県議の勉強会や視察といったプロセスが必要になると感じた。

韓国側の方々とはとてもフレンドリーで温かくもてなして頂いた。河口堰を通じて生物多様性の復元や、保全と一緒に考えて取り組んでいきたいとの熱意を感じた。

夕食会では、韓国側のキム・ヘチャン教授にハーモニカを披露して頂けるなど、打ち解けた雰囲気交流が深まった。日本側も何か歌でも披露できればよかった。(難しいが・・・)

◇視察各所所感

○大渚水門 河口堰上流部の取水口。台風が近づき、雨も降っていたが、川は濁流というわけではなく外見は穏やかに見えた。取水口は幅約30メートル。流れ込んでいるのだろうが、高低差を感じなかった。

大渚トマト農園の聞き取りでは、ここへの水門からの配水は、塩害の観点からではなく、上流域の開発による水質汚染の影響に配慮して補償的に行われたとのことだった。水栓箱にはカエルが入っていたようだった。トマト農園全体は日本の農園と比べるとそれほど大規模には見えなかった。周辺の植生、景観は日本と非常によく似ており、橋梁や道路の形態も日本と酷似しており、

文字の違い以外は日本とほとんど同じ雰囲気を感じた。

○ 二日目の河口堰展望台は、台風10号の影響が非常に強風だった。河口堰の全景は、長良川河口堰と酷似していた。魚道の見学は清掃されておらず、遠距離ということで見学できなかった。

台風が近づきつつある状況での河口堰の運用状況をもっと深く聞き取るべきだった。ナクトンガン上流の天候と、降雨量、そうした降雨量を受けて、河口堰はどう運用しているのか。開放措置として一か所は常時開放(河川下部を開放している)しているとのことで、視察日も同様の運用だった。恐らく降雨量が危険水域迄達すれば全面開放するのだろう。長良川河口堰の運用も同様だが、台風が近づく中、どういう警戒態勢を敷いているのかももっと聞き取るべきだった。

河口堰には内部見学できる部分もあり、昨年、整備したとのことで、非常に新しく、映像もあり、斬新なプレゼンテーションが行われていた。無料で開放されていると思われる。

エレベーターで河口堰上部のテラス迄出ることができ、見学施設として十分な整備が行われていた。

○洛東川エコセンターは、環境教育の拠点として、目の前の池の大きな展望施設や屋内の生物類の展示など、最新デジタル技術を使って行われていた。河口堰開放の在り方を環境保全・復元先端事例として世界に発信しようとする意気込みを感じた。池の奥には、茶色の野鳥観察施設があった。恐らく冬季にはもっと多くの渡り鳥がみられるだろう。オオハクチョウのサイズが分かる展示があり、手を広げた人より大きいのに驚いた。

河川生物では日本では絶滅したカワウソ(韓国はユーラシアカワウソ)が生息し、観察記録もあった。韓国でも絶滅危惧種らしいが河口堰周辺の生物相の豊かさを感じた。

ナクトンガンと西ナクトンガンの間にできた江西区の中州エリアは、空港もあり、体育館や運動場など大型施設はあるがほかの沿岸部のようなマンション群など住居は認められなかった。歴史的に洪水エリアで居住地として価値が認められていないのかと感じた。しかし、国際空港があるので、かなり防災対策は取られているのだと思われる。このエリアは、かつて廃棄物処理場としても利用されていたこともあるといい、その辺の状況も聞き取ればよかった。

○意見交換会は、日韓とも充実した資料があり、理解が深めあえられたのではないだろうか。ナクトンガン河口堰開放は、釜山市を中心とした流域自治体が一体感を持っており、合意形成ができやすかったこと、行政関係者が NGO 運営側にまわったり、NGO メンバーが行政側にまわったり(NGO 代表の子息が釜山市役所に就職するとのことだった)人事的交流が行われている事情なども背景にあると感じられた。そして国が、1960年代からこのエリアを天然記念物指定し、かなりの保護施策を行ってきたことも、河口堰開放につながっている要素に感じられた。

○その後、一般人立ち入り不可のオペレーション施設を視察した。3D でつくられた流域模型に川の流れが反映されて興味深かった。また、西ナクトンガン側の河口堰の魚道を視察した。施設自体は整備されていたが、魚道のガラス面はコケがついて、流出物もあり、透明度も悪く、魚の状況を確認することは難しかった。この状況は、現在の長良川河口堰の魚道観察施設と同じだと感じた。ただ、長良川河口堰の魚道観察施設は、最新の液晶ディスプレイを備えた韓国とは比較するまでもなく古くさびれている。

パク・マンジョン教授からは、上流の長良川鵜飼など文化的側面から岐阜、三重とも連携を取って理解を深め合うのが重要ではないかとの指摘を頂いた。

○最終日の、海苔養殖をするオ・ソンテ漁協組合長ら漁民からの意見聴取では、海苔の品質向上には、河口堰をもっと開けて川の養分を流れ込ませることが必要との指摘があった。その後の、昼食では貝料理専門店へ行った。シジミの吸い物、バカガイ(青柳)を茹でたもの、海苔が振舞われ、河口堰周辺の海の恵みを味わった。ただこうした店も数すくなくなり、この店が唯一といくらいだそうである。気候変動の影響を尋ねると、海水温の上昇で養殖魚が死んでしまう被害があるとのことだった。

ナクトンガン河口堰、長良川河口堰は、日韓の大きな懸け橋の役割を果たしているのではないのでしょうか。日韓も、愛知、岐阜、三重も(三重の人は愛三岐と言ってほしいそうです)国も、コミュニケーションの構築こそ肝要ではないかと強く感じた視察でした。

※補足 帰国後、当学で同じ学部の韓国人で釜山外国語大学と関係のある講師(労働法)に視察のことを話すと、釜山では、水道の水は飲まず、ミネラルウォーターなので、河川から導水してもそんなに恩恵は大きくないのでは、との話がありました。日本の清流と違って韓国の川は汚いという認識が国民に根付いている、とのことでした。日本の河川の水質浄化技術は、韓国をはるかに上回っているとのことでした。